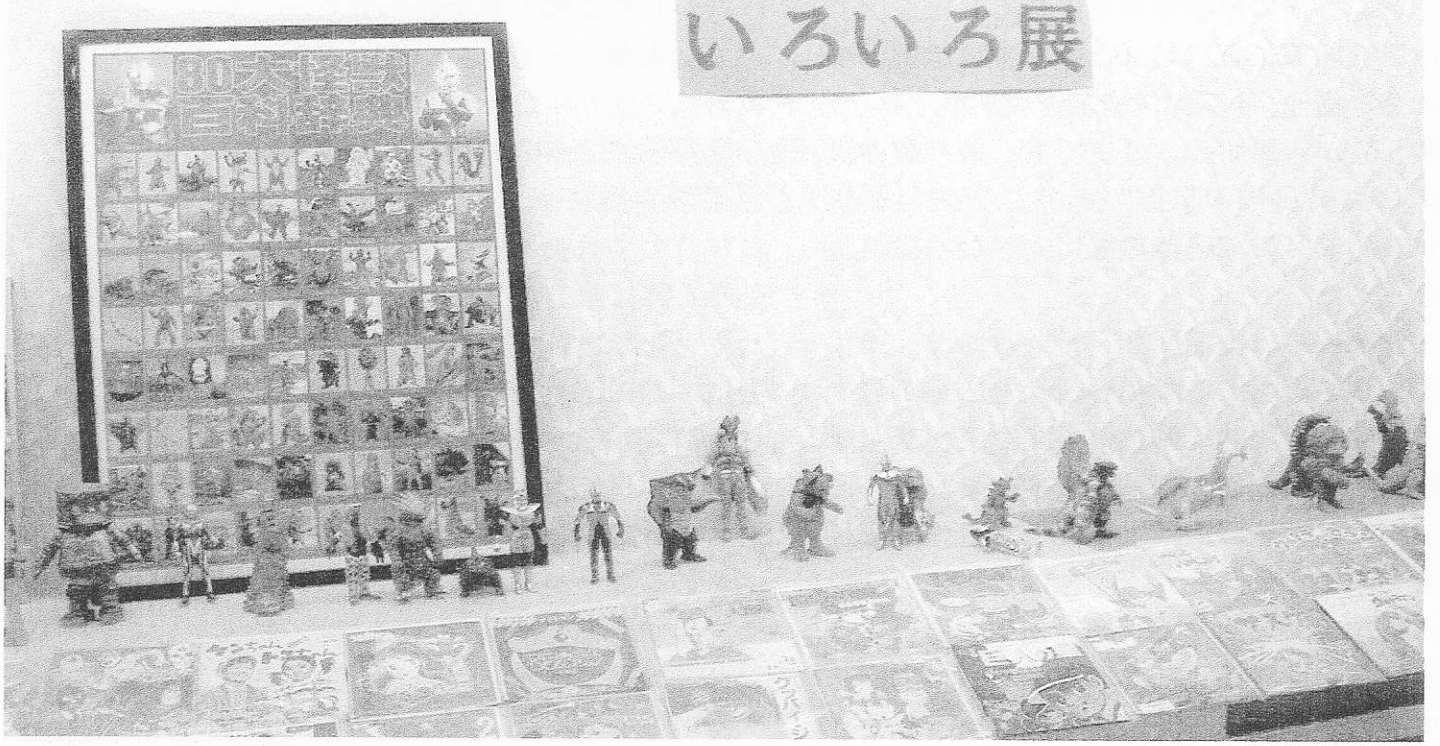
れき　みん
となん歴民だより vol.16

Morioka tonan history and folklore museum　平成20年9月24日発行

発行　盛岡市都南歴史民俗資料館　盛岡市湯沢 1-1-38　TEL019-638-7228

鎌田 隆 コレクション

おもちゃ いろいろ展

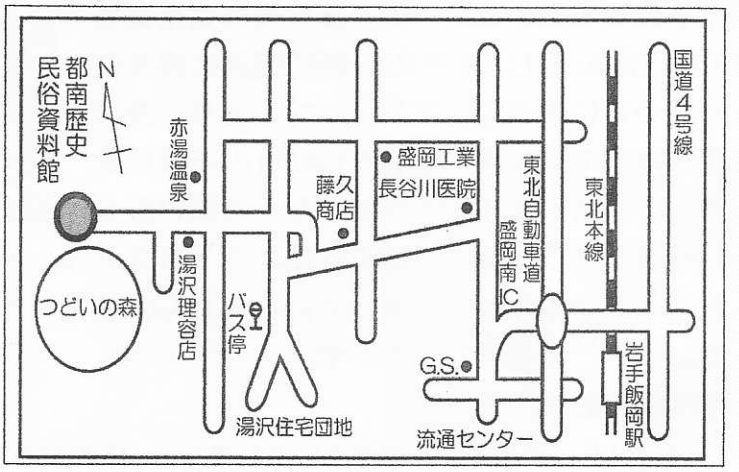


市民参加展「おもちゃいろいろ展」

— もくじ —

- ＜特別寄稿＞盛岡の津軽町と舟橋騒動始末　～後編～
- 報告　市民参加展
- 指定文化財紹介⑯
- 資料は語る⑯
- となんの昔ばなし⑯

MAP☆ACCESS



○利用案内

開館時間　午前9時から午後4時まで

入館料　無　料

休館日　月曜日
（休日に当たるときは、直近の平日）
年末年始

【特別寄稿】

盛岡の津軽町と舟橋騒動始末　～後編～

元盛岡市文化財保護審議委員　小笠原　勝　郎

○　岩木町を訪ねて

昭和 61 年５月 28 日、津軽の岩木町を訪ねる機会がありました。盛岡市郊外にむかしあった「津軽町」について知りたいと岩木町教育委員会にお願いしたら、岩木町文化財審議会会長の笹森謙吉氏を紹介されて喜んで出かけました。

笹森氏によれば、盛岡に移り住んだ津軽の人々は、おそらく「舟橋騒動」と関係があるだろうとのことでした。

津軽為信の津軽藩独立に尽くした重臣には津軽四天王と言われた兼平中書綱則、森岡金吾信元、小笠原伊勢信浄、乳井大隈（修験）らがいます。この中でも、兼平中書綱則は津軽譜代の重臣であり、天正 16 年(1588)3 月の津軽藩独立に大きな功績がありました。

津軽藩の「舟橋騒動」というのは、兼平氏をはじめとする譜代の武士と江戸からやって来た輸入武士の抗争です。三代藩主津軽信義の初入部の日、新領主のお国入りとあって、地元の家臣たちはそろって高杉村まで出迎えました。新領主には、江戸屋敷から信義の守り役として舟橋半左衛門親子が同行してきました。この親子が、出迎えの譜代の家臣たちに対して馬に乗ったまま挨拶もなく傍若無人に振舞ったのが騒動の始まりになりました。殿様の縁類でもあり、初代為信以来の譜代の家臣でもある兼平、乳井たちにすれば、舟橋親子の振る舞いはどうしても腹にすえかねました。そして色々なことについての不満がついに爆発し、兼平伊豆、乳井美作が先頭になって、反舟橋のボイコット運動に発展してしまいます。

寛永 13 年(1636)正月、津軽藩の舟橋騒動は徳川幕府の知るところとなり、兼平伊豆と乳井美作は毛利甲斐守にお預け、舟橋半左衛門とそれに加担した乾四郎兵部は伊予の松平隠岐守にお預けの裁断が下されました。この時、兼平伊豆と乳井美作とともにおおぜいの者たちが津軽の国元を立ち去ったといいます。そしてその一族が盛岡南部を頼って盛岡に移り住んだのではないかというのが笹森氏の推測でした。

○　永井の兼平家と神田塚

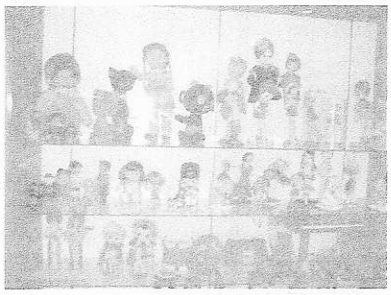
盛岡市永井に神田の屋号を持つ兼平家があります。そこの兼平リウさん（故人）が「むかし白太郎と黒太郎が青森からやって来て、永井の一帯を拓いた。それが今の永井のはじまりになった」と話してくれました。兼平家は永井村の肝入を務めたりして地域の発展に尽くしました。宝暦 12 年(1762)の「見前村曹洞宗清水寺本堂建替寄進帳」には永井肝入藤兵エが多額の寄進をしたと記録されています。また稲荷街道絵図には神田藤兵衛屋敷が記されていますから、津軽からお国払いになった津軽の人々は盛岡の地で豊かな生活の場が与えられたとも言えるでしょう。

ところで、兼平総本家の屋敷の南の水田には今でも「神田塚」が残されています。お盆には必ず供養していると聞きました。

神田塚の上には「金氏」と印刻された石があります。金氏は津軽の武将といわれています。兼平氏の先祖たちと一緒に盛岡に移り住んだのでしょう。神田塚の「金氏」の石は同郷の士の互いの強い絆を示す証拠かもしれません。現在、兼平を名乗っている人たちは盛岡に７０軒以上もあります。

※小笠原勝郎氏は平成２０年４月２６日、脳梗塞のため逝去いたしました。生前は当資料館の運営委員長として、資料館の運営にご協力とご指導を賜りました。心からご冥福をお祈り申し上げます。

報告



7月16日～8月24日

市民参加展「おもちゃいろいろ展」

「おもちゃいろいろ展」は、今年度２回目の市民参加展として鎌田　隆さん（盛岡市天神町）のコレクションを紹介しました。

今回の展示会では、「トミカのミニカー」や「グリコのおまけ」、さまざまな素材の人形など約８００点を紹介しました。展示だけでなく実際に手にして遊べるコーナーも設けたため、家族で遊びに来る見学者が多数訪れ、大盛況でした。

次回は１０月８日から３１日まで「岩手の風物絵皿展」を開催する予定です。

盛岡市所在指定文化財紹介⑯

市指定　無形民俗文化財

盛岡さんさ踊り

「さんさ踊り」は、盛岡市を中心とする県央部に広く行われてきた盆踊りで、その起源にはいくつかの種類がありますが、広く語られている伝承は三ツ石大権現の悪鬼退治伝説に由来するものが多いです。踊り形式は、盛岡の近世城下形成期に形作られたと思われます。

芸能化の進展に伴って花笠をつけた踊りの一団が家回りして踊り、供養する形態から、町並みを門付けして踊る祝福芸能に変容しました。

踊りの内容は、地域の諸芸能の影響を強く受けて多様な寺踊りの様式を生じ、曲種も極めて多く、現行の踊りは基本型・甚句型・くずし型・即興型の４種に分けて考えることが出来ます。

歌詞は短詩型からなる近世歌謡調で、歌を掛け合わせる「歌がけ」の遺風を伝えるものがあります。

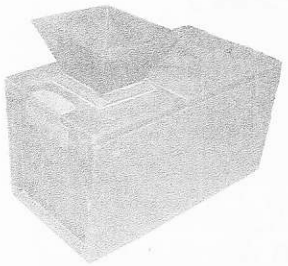
盛岡地方のさんさ踊りは、近世調の変化に富んだ盆踊りとしての特徴を有するばかりでなく、家回り・町流しなど類例の少ない民俗的習慣を伝えるなど地方的特色が著しいです。

市無形民俗文化財に指定されたさんさ踊り１６保存会は伝統的さんさ踊りの保持団体として、保存継承及び発表活動を活発に行っています。

参考・引用資料
盛岡市教育委員会
『盛岡の文化財』　１９９７

資料は語る　⑯銭箱（ぜにばこ）

当資料館の収蔵資料をひとつ取り上げて紹介します



現代では、店のお金はレジスターで出し入れし、まとまったお金は金庫に入れたり銀行に預けたりしますが、江戸時代の商店では銭箱、銭袋、千両箱などでお金を管理していました。

銭箱は、小銭を入れておく箱で、簡単な手提げ式の箱のほか、上に広く開いた口がついていて、遠くからでも銭を投げ入れられるもの(写真)もあり、多くの店に常備されていました。

引用資料／河出書房新社　『日本の生活道具百科４　働く道具』　１９９８

となんの昔ばなし⑯

『飯岡の名』

それは、今から千二百年ほどの昔、坂上田村麻呂という武人が、天皇の命令で征夷大将軍となって、たくさんの兵を連れてエミシを天皇に従わせるために来たときの話です。

その頃の岩手は日高見の国といわれ、阿立流為（あてるい）という大王がいて、自分たちの国の独立を守っていたのです。紫波郡には、阿奴志己（あぬしこ）、於夜志閉（おやしへ）、宇加奴（うかぬ）、志和宇志（しわうし）、億可太（おかた）という村々の王、飯岡には高丸という王がいました。

たびかさなる戦いで、坂上田村麻呂の引き連れてきた兵たちも食糧不足と疲れで、一歩も進めずに、その場にうとうとと眠ってしまいました。

坂上田村麻呂は夢の中で観世音さまが現れて「眠ってしまってはいけぬ、この辺の木の実や草をたいて食べるがよい。米と同じに元気になるから、早く兵も起こして、そのようにしなされ。眠ってしまっては死ぬだけじゃ。」といわれて消えました。

ハッとして目をさました坂上田村麻呂は、観世音さまのおつげのとおりに、兵と共に木の実や草の葉を集めて、たいて食べました。ほんとうの米のごはんとかわりなく、たちまち元気をとりもどしました。

これも観世音さまのおかげであったと、飯岡山に観世音さまをまつりました。このことがあってから誰いうともなく、観世音さまのあるこの里を飯岡というようになりました。

出典『となんの民話』（都南歴史民俗資料館）